

令和6年度
尼崎市文化ビジョン（第2次）推進懇話会
報告書

令和7年6月

尼 崎 市

1 趣旨

文化芸術基本法では「地方公共団体は、基本理念にのっとり、文化芸術に関し、国との連携を図りつつ、自主的かつ主体的に、その地域の特性に応じた施策を策定し、及び実施する責務を有する。」と定められています。

こうしたなか、尼崎市では本市の最上位計画にあたる「尼崎市総合計画」の分野別計画として、平成29年に尼崎市文化ビジョンを策定しました。その後、令和4年度に改定を行い、令和5年度から令和14年度までを取組期間とする「尼崎市文化ビジョン（第2次）」（以下「ビジョン」という。）を策定しました。

ビジョンでは、その推進にあたり、市が責任を持って文化芸術振興の役割を担うことを明確に示しており、その評価にあたっては、「本市の取組の柱」に基づく取組を定性的な視点からも評価することとしております。そのため、「尼崎市文化ビジョン（第2次）推進懇話会」（以下「懇話会」という。）において聴取した市民や専門家等の第三者からの意見を参考に、取組の効果を検証し、施策評価に反映することで、PDCAサイクルを通じて効果的な文化施策の展開を図っていきます。

2 懇話会について

懇話会は、学識経験者や文化活動を行っている者等から構成され、文化事業等に関する意見交換を行います。

尼崎市文化ビジョン（第2次）推進懇話会 委員（50音順）

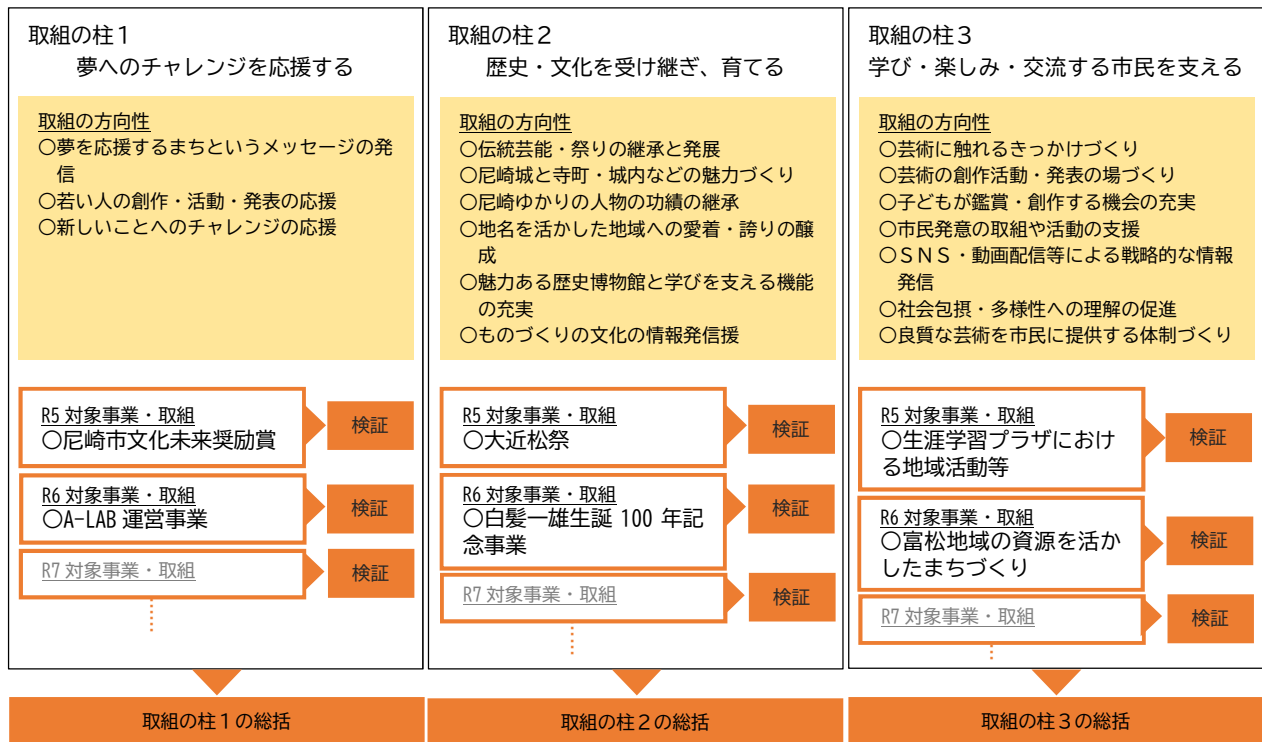
氏名	所属
大永 尉恵	子育てサークル「にこにこ」代表 放課後等デイサービス「ヤシノキ」代表
狩谷 春樹	生田流箏曲「新絃社」三代家元 尼崎芸術文化協会運営委員
辻川 敦	元尼崎市立歴史博物館職員
中田 秀人	アニメーション作家 A-LAB アドバイザー
船木 成記	総務省地域力創造アドバイザー 公立諏訪東京理科大学理事、尼崎市顧問
善見 壽男	富松神社宮司

3 令和6年度の実施内容について

ビジョンの3つの取組の柱の方向性に沿った取組が実施されているかを検証するため、毎年度、複数の事業・取組を対象として、懇話会による事業視察及び意見交換等を行います。

令和6年度は、取組の柱1「夢へのチャレンジを応援する」の事業としてA-LAB 運営事業を、取組の柱2「歴史・文化を受け継ぎ、育てる」の事業として白髪一雄生誕100年記念事業を、取組の柱3「学び・楽しみ・交流する市民を支える」の取組として富松地域の資源を活かしたまちづくりの事例を取り上げました。

取組の柱の検証イメージ



4 懇話会による検証結果

取組の柱 1 夢へのチャレンジを応援する

（目的）若い人の夢を後押しし、飛躍のきっかけとなる機会を提供することや、年齢を問わず新しいことにチャレンジする人を応援することで、本市が夢へのチャレンジを応援するまちであることを発信するとともに、その活動を広げていく。

対象事業 A-LAB 運営事業

A-LAB でこれまで実施してきた展覧会内容や作家アンケート結果などをもとに意見交換を行った。懇話会当日開催中であった第2回白髪一雄現代美術賞受賞者個展 井上裕加里 「JIN, JIYAN, AZADI 女性、命、自由」の視察も行った。

事業の概要

廃館となった公民館分館をリノベーションし、若手アーティストの発表・創作の場として平成27年秋にオープンした。

年4～5回のグループ展や個展を開催するほか、ワークショップも展開。作家のチャレンジを応援するため、設営サポートを柔軟に行っていることが特徴。

出展作家アンケートでは、企画内容や設営サポートについて高い満足度となっており、施設の立地についての満足度は比較的低かった。

毎年開催してきた「Artist Gate」（大学・専門学校を卒業予定、または大学院を修了予定の方を対象としたもの）は次回で10回目を迎える。

【R6年度実績】展覧会4回、来場者数1,915人



検証結果

評価 された点	○アーティストの表現としてのチャレンジを柔軟に許容し、支援していることが評価できる。 柔軟なサポートという姿勢・コンセプトは継続していくべきで、現在の施設が使用できなくなったとしても場所を変えて職員が芸術家をサポートすることを継続できるとよい。また、そういった職員をどれだけ育成していくことができるかが重要である。 ○アートスペースであると同時に、人が集まり、出会う公共スペースとしての機能もある。
課題	○アクセスが良いわけではないことが来場者数の少なさに影響しているとも考えられる。一方で、集客については芸術家の努力も必要である。 ○若者でなくてもサポートやチャレンジの場は必要であり、幅を広げて応援していくことも検討して欲しい。 ○コンセプトやストーリーの見える化をするなど、戦略的に考えた方がよい。

取組の柱 2 歴史・文化を受け継ぎ、育てる

(目的) 過去から受け継がれてきた伝統芸能や祭り、本市ゆかりの人物といった様々な歴史・文化について、学び・楽しみながら、それらが守り伝えられ、まちづくりに活かされていくよう、まちの誇りとして育てていく。

対象事業 白髪一雄生誕 100 年記念事業

記念展「生誕 100 年白髪一雄 行為にこそ総てをかけて」を中心として、その他関連展示などの視察を行い、意見交換を行った。

事業の概要	
尼崎で生まれ育ち、暮らした世界的抽象画家・白髪一雄の生誕 100 年記念展と、関連事業を実施した。 記念展では、生家「本市呉服店」関係資料やアトリエの再現コーナーなどにより人物像に迫るとともに、代表作のフット・ペインティング作品だけでなく、初期から晩年までの作品を紹介。国内の主要美術館からも作品を借用。来場者数 3,079 人。 関連事業では、第 1 回白髪一雄現代美術賞を受賞した美術家・林葵衣らによる企画展のほか、人気声優による朗読劇やまち歩きツアー・まち歩きマップといった多角的なアプローチを行った。また、市報特集や小学生向け動画の配信といった広報も行った。	

検証結果	
評価された点	○エネルギー、パワーを体感できる記念展だった。子どもやアーティストを目指す人にも見て欲しいものだった。 ○展示を順に見ていくことで白髪さんの考えを想像でき、フット・ペインティングという手法に至った理由を感じることができた。 ○尼崎のまちで育ったことが作品に影響しており、尼崎の誇りであると思わせるものだった。 ○白髪さんのフット・ペインティングは、イノベーションという観点でも学びになる。 ○関連事業を含めて多様な展開ができていた。
課題	○来場した市民や広報に接した市民は限定的であったと言わざるを得ないので、例えば SNS で注目されるような発信ができるとよかった。 ○周年事業で終わらず、アウトリーチ事業などを今後も継続していくことで、子どもたちに浸透していくと思われる。 ○地域に広げていけるかどうかは、市民をどう巻き込んでいけるかが重要である。

取組の柱 3 学び・楽しみ・交流する市民を支える

（目的）市民が文化・芸術に触れる機会を増やし、文化・芸術を創作・発表できる場づくりを行うことで、学び・楽しみ・交流する市民を支えていく。

対象取組 富松地域の資源を活かしたまちづくり

懇話会メンバーであり、富松城跡を活かすまちづくり委員会相談役の善見委員より、富松地域のまちづくりのきっかけや、地域の歴史資源を活かしたまちづくりの実践について紹介いただいた。関係する市職員も参加できる拡大版として開催し、来場者との意見交換の後、善見委員、船木委員、辻川委員によるトークセッションを行った。

取組の概要

地域に暮らす新旧住民の交流や子どもの故郷づくりのため、富松の資源である薪能・一寸豆・茨木童子・富松城跡・富松神社を活かしたまちづくりを展開してきた。平成 14 年には「富松城跡を活かすまちづくり委員会」を設立。富松城跡は競売にかけられる恐れがあったが、令和元年度に土塁周辺部分の市有地化が完了した。

これらの活動のきっかけは、善見氏が昭和 63 年に尼崎北小学校の PTA 会長に就任した際に、新・旧住民の軋轢を感じたこと。新旧住民の融和のため、地域の歴史や文化を大人が学び、それを子ども・新住民にも伝えていく活動を、多くのテーマ別グループとともに楽しみながら実践してきた。

都市化する地域のコミュニティ形成
新・旧住民の軋轢（あつれき）
この課題を解決するには、どうすればよい？
分析…新住民は地域の歴史文化を知らない。
旧住民は地域の魅力を伝えていない。
○地域の魅力を地域に伝えよう！ ＊グループ「富松21」の結成
◆新・旧住民の融和を目指す
◆地域コミュニティの再生
◆人間関係（絆）づくり
◆子どもたちの「ふるさと」を創ろう！



検証結果

評価 された点	○思いを共有した様々なグループができ、未来につながっていったことが素晴らしい。 ○富松のような取組がない地域では、地域のことがよく分からない。子どものころの地域行事の記憶はずっと残るものであり、大切にすることが必要である。 ○観光資源でも指定文化財でもない富松城跡が保存されたことは奇跡のようなことだと感じている。それは、自ら地域・コミュニティにとっての価値を見出し、活動したことで実現できたことである。 ○まちのアイデンティティの根幹になるものを、地域で大切にすることで次の世代に引き継いでいくことができる。富松地域はそのパイロットケースである。
課題	○活動しているメンバーの世代交代が課題とも言われるが、地域資源を通じて人々が学び合う場があり、それにより地域の関係性を高めていく、自ら住みたいまちをつくっていくことを大切にすることが必要である。

全体を通して

令和4年度に改定した文化ビジョンでは、「第6次尼崎市総合計画」の中で、文化施策の位置づけが「地域コミュニティ・学び」の一施策となったことを受け、狭義の「文化」にとどまらない取組をしていくこととし、3つ目の取組の柱に「学び・楽しみ・交流する市民を支える」を掲げました。

令和5年度は、狭義の文化にかかる事業・取組を対象として検証するだけでなく、「生涯学習プラザにおける地域活動等」を取り上げるとともに、社会の基盤として「文化」を捉えることに関して議論を深めました。

令和6年度は、「富松地域の資源を活かしたまちづくり」を取り上げ、市民主体の活動について学び、行政がどのように市民主体の活動と連携し、サポートすべきか考えました。さらに、歴史や文化を活かしたまちづくりを通じて、人と人とのコミュニケーションや共感、地域への愛着が生まれることで、地域で人を育てていくという文化の意義を再確認することもできました。

また、若手アーティストの発表・創作の場である「A-LAB 運営事業」も取り上げ、アーティストを柔軟にサポートできる人材がいることだけでなく、そういった場があることの意義も評価することができました。本市はその歴史的背景や地理的特徴から、“誰かのチャレンジを応援するまち”という特徴があり、それを具現化するような様々な事業・取組があります。そうしたまち全体の視野の中で、その一部を形成するものとして A-LAB を捉えることができました。

令和7年度からは委員の2期目となりますが、引き続き、社会の基盤として「文化」を捉えながら、検証していきます。

資料編

第1回懇話会の様子

日時 令和6年6月26日（水）15時から17時20分まで
場所 尼崎市総合文化センター7階第4会議室
出席委員 大永委員、狩谷委員、辻川委員、船木委員、善見委員（欠席：中田委員）

議題

- ・「令和5年度尼崎市文化ビジョン（第2次）推進懇話会報告書（案）」について
- ・令和6年度実施内容（案）について
- ・「白髪一雄生誕100年記念事業」について＜（公財）尼崎市文化振興財団職員より説明＞

第2回懇話会の様子

日時 令和6年8月6日（火）15時30分から17時まで
場所 尼崎市総合文化センター4・5階美術ホールほか
出席委員 大永委員、狩谷委員、辻川委員、中田委員、船木委員、善見委員
（合同事業視察に参加できない委員は、会期中に視察）
内容 白髪一雄生誕100年記念事業記念展ほかの視察

第3回懇話会の様子

日時 令和6年9月26日（木）15時から17時20分まで
場所 尼崎市役所議会棟 東会議室
出席委員 大永委員、狩谷委員、辻川委員、中田委員、船木委員、善見委員
※（公財）尼崎市文化振興財団職員がオブザーバーとして参加

議題

- ・尼崎市総合文化センター耐震化事業について（中間報告）
- ・「白髪一雄生誕100年記念事業」について

意見交換の様子

「白髪一雄生誕100年記念事業」について

- ・「生誕100年白髪一雄展」は、入口からワクワクした。闇があって、光があって、というのがとても激しい人だと思った。どの作品も魅力的で、吸い込まれそうな絵もあったし、その場所にいるのがしんどくなるくらいエネルギーが全ての作品に宿っていることを肌で体感した。
- ・「生誕100年白髪一雄展」は、白髪さんを知らなくても白髪さんの世界に没頭できるつくりになって

いたのがよかった。私も足で絵を描く人とは知らなかったが、経緯を知って見るとパワーを秘めていたんだなと思った。子どもたちやアーティストを目指す人に、こういうものを見て感じてもらったうれしいと思った。今にも動き出しそうな作品を作り続け、亡くなるまで作り続けていたというのを聞いて、「生まれ持った天才っているんだな、それが尼崎にいらっしやったんだな」と思った。

- ・「生誕 100 年白髪一雄展」は、冒頭で地図や写真など歴史博物館アーカイブズの資料が活用されており、白髪さんの生涯や作品の背景が紹介されていて、歴史博物館との連携ができた点はよかった。個人の感想としては、バックグラウンドを紹介しているので、ストーリーがあり、見方が固定されてしまうような弊害があるかなと思った。
- ・「生誕 100 年白髪一雄展」は、白髪さんを知らない人が、人物を面白く知ることができる、よい展覧会だと思ったが、本人がご存命だったら「これは見せたくない」とか「この順番で見せたくない」といったこともあったかもしれないと感じた。迫力や存在感を目の前で感じる展覧会だったが、それだけでなく「こんなことを考えたんじゃないかな」と思ったり、作品から作った人のことをどう感じるか。白髪さんは、奇をてらったわけではなく、なるべくして足に行きついたんだというのが見えた。スピード感、偶然性があると思うと、自分の体の中で一番大きなストロークでできる方法、それが、ぶら下がっての「足」だと思う。それをインタビューなしに、作品を見ている順番で感じ取れたというのが一番面白いと思った。計算だけでできない、計算して最後にいきつく偶然があつて、偶然こそが完璧だという信念をもって描いておられるのだと思う。普通にやっても、こうはならない。美術を学んだ人間でないと、ここでストップとできないと思う。あと一本の線を足すかどうか、それをどう判断していたのだろうと思う。
- ・私は、生誕 100 年事業を組み立てて、どう文化力を高めていくかという主催側の視点で見た。私は懇話会が 2 期目だが、1 期目のときに、子どもたちが白髪さんを体験するフット・ペインティングのアウトリーチ事業の視察もした。今回、事業そのものの組み立てが、とても多様だった。「生誕 100 年白髪一雄展」は、解説付きでとてもよかったし、「世界の白髪を、尼崎の白髪にしたい」、それが非常に伝わった。気になったのは、展示されている白髪さんの作品の合計価値が数百億円くらいかと思ったが、それがガードマンも何もなく視察して、展覧会中の警備はどうだったのかと思った。そして、これらの作品を市の資産として持っていることを貴重に感じた。
- ・「生誕 100 年白髪一雄展」は最終日に見た。絵画はあまり知識がないが、エネルギーを浴びて圧倒されてしまった。白髪さんが足で描こうということは、行為に意味があると思う。まさに、アートにおけるある意味イノベーションだったのだろう。そういうことをした方が、どこか遠くの特別の存在ではなく、尼崎ですぐ近くに暮らしていたということで、尼崎の誰もが、可能性を秘めていて、未来の自分にも期待できるということが、学校での体験授業で感じ取ってもらえたらいいのでは。結果重視の時代だけれど、プロセスにこそ、意味があることを子どもたちに伝えられたらいいと思う。
- ・現在の白髪一雄記念室は、限られたスペースに作られているが、耐震後には、今の状態を再現するのではなく、記念室のスペースやあり方をしっかり考えて、意味あるものを作った方がいい。
- ・「声優朗読劇フォアレーゼン」は、内容は難しかった。有名な声優が出演するということで身近にチケットを購入した人もいた。鐘の音がミュージカル「エリザベート」の最初の場面を彷彿とさせた。リュートの音はおどろおどろしい感じもして、闇の部分、深い部分をこう表現するのかと思った。
- ・「声優朗読劇フォアレーゼン」は X で発信している人がたくさんいた。

＜ワークショップ形式①どんなところが市民の誇りにつながったと思うか＞

大永委員、狩谷委員、辻川委員のグループ代表

- ・見たら誇りに思うが、知らない人は知らない、というところにたどり着いた。市報特集はおしゃれだなと思ったが、若い人達は市報を見ないかもしれないし、ネットやソーシャルメディアで発信できると広く伝わる。
- ・僧侶になって、私のように天国のように感じる場合もあるが、力を失ったとを感じる人もいる。人によって見方が変わると思った。
- ・尼崎で育って、だんじりなど幼い頃に見たことが影響しているのが白髪さんの原点にあることを誇りに思ったらよい。
- ・「誇りに思う」ということ自体が難しいテーマだった。私ははっきり分かるもの「世界に行きました」「この作品何百ドル」と言われると、「すごい、友達に教えよ」と思うので、どんどん伝わっていき、全員に伝わっていくのかなと思う。

(事務局) 中田委員、船木委員、善見委員のグループ代表

- ・見に来た人の誇りは上がるんだろうけれども、見てきていない人の誇りは上がっているのかという意見が出ていた。事業の振り返りでは集客力が常に話題になるが、今回はよかったとは言え、誇りが広がるまでは難しいかなというところ。白髪さんを初めて知った段階ではないか。認知度や認知内容を調査してみてはどうかという意見も出た。事業の設計はよかった。

<ワークショップ形式②今後に期待すること>

大永委員、狩谷委員、辻川委員のグループ代表

- ・アウトリーチ事業は、小学校でも来ていないところがある。それがもうちょっと拡大したらいいな、市民参加のイベントもあつたらいいなと思う。尼崎大学とのコラボイベントが盛況に終わったということなので、ナイトミュージアムのような要素もあり、よかったと思う。
- ・101 年からどうするか、ここからもう一歩階段を上るのは大変だと思うが、子どもに植え付けるじゃないけれども、継続してやれば、大人になったときにも思う。
- ・白髪一雄の DVD の配布先を拡大できたらよいが、受身型から能動的になれるようなポイントが見つけられたらよい。
- ・今回できたつながりを次につなげる、アンバサダー的なものなのか、つながっていった人からするのか。市民でつくるイベントができてくれば、という意見が出ていた。

(事務局) 中田委員、船木委員、善見委員のグループ代表

- ・白髪さんのすごさを感じられる市民を増やしていきたい。それに向けて、中高生の教育に取り入れて欲しいということ。単なる周年事業でなく、白髪さんがいた意味を伝え続けていかないといけない。
- ・アートはもちろんだが、白髪さんのイノベーションが新規事業開発の教本となるのではないかな。
- ・作品の金額ですごさが伝わるという意見もあつたが、外からの評価を上げる、世界的な価値があることを市民に伝えるのが大事だという意見があつた。
- ・記念館という形では難しいのか？という意見もあつた。
- ・いわゆる文化事業としての狭い範囲で考えるか、地域社会に必要なものとして捉えることができるか、どう広げていけるのかという視点が重要。他の自治体とは違い、尼崎市は、文化担当が協働セクショ

ンにあることに意味がある。地域の暮らしや日常との接点を持ちながら広げられないか、事業としてやって欲しいと思う。接続できる価値と意味を広めて欲しい。どうやって地域を巻き込むか、鑑賞されたり、消費される作品に視点を当てた、いわゆるアートの側面だけではなく、尼崎市民として暮らしていた白髪さんを見出してもらいたい。

- ・他には、近松も落語も、地域とその歴史や価値などを共有していく運動体のようなものをプロデュースする方法もあった。

第4回懇話会の様子

日時 令和6年11月28日(木) 14時30分から16時20分まで

場所 尼崎市立立花南生涯学習プラザ 会議室

出席委員 大永委員、狩谷委員、辻川委員、中田委員、船木委員、善見委員

※市政課題研修としても位置付けて開催(市職員も参加)

講演「富松地域の資源を活かしたまちづくり」

※「富松城跡を活かすまちづくり委員会」相談役でもある善見委員より講演

※説明資料抜粋

尼崎北小学校区における
地域歴史資源を活かした
まちづくりの取り組み

**未来を拓く
住民主体の
まちづくりを目指す！**

令和6年11月28日
富松城跡を活かすまちづくり委員会
善見寿男

尼崎市
文化ビジョン
(第2次)
推進懇話会



昭和35年(1960年)頃から農地が宅地に…

阪急塚口駅～武庫之荘駅を起点に宅地化

日本の高度経済成長と共に、
尼崎市北部は急激に都市化していった！

昭和35年(1960年)頃から農地が宅地化されつづけ…人口が増大。
現在、富松地域の人口は、1万人を超える。

住居表示の変更(S.50年代)に伴い、富松地域に変化。

名称「尼崎北小学校」の悲しみ

昭和30年代半ば(1960年)頃から都市化
農地が宅地に 人口急激に増加

S.42.4.7 開校(塚口小学校より分離)
(1967年) ↓ **60年前**

*よそ者(新住民)と田舎者(旧住民)
新旧住民の軋轢(あつれき)

名称 「塚口西小学校」と「富松小学校」

都市化する地域のコミュニティ形成

新・旧住民の軋轢(あつれき)

この課題を解決するには、どうすればよいか？

分析…新住民は地域の歴史文化を知らない。

旧住民は地域の魅力を伝えていない。

○地域の魅力を地域に伝えよう！ *グループ「富松21」の結成

◆新・旧住民の融和を目指す

◆地域コミュニティの再生

◆人間関係(絆)づくり

◆子どもたちの「ふるさと」を創ろう！

地域住民が出会うための機会づくり

仮説 *地域住民が知り合いになるために…
地域に潜在する歴史資源を活用できないか？

- ・地域の歴史文化を知る⇒共通の話題ができる。
- ・行事に参加する ⇒ 知り合いが増える。
- ・地域づくりに関心を持つ

⇒まちづくりに参加する。

*その結果…地域連帯感がうまれる⇒
子どもが健全に育つ地域の教育環境が整う…

実験

地域の歴史資源の発見と紹介

地域の歴史資源を活かしたまちづくり実践

1. 古典芸能－富松薪能 …能 のう
2. 伝統野菜－富松一寸豆…豆 まめ
3. 伝説の鬼－茨木童子 …鬼 おに
4. 中世の城－富松城跡 …城 しろ
5. 鎮守の森－富松神社 …宮 みや

地域には有形無形の文化財がある！

富松薪能



富松一寸豆祭り



伝説の鬼-茨木童子



富松城跡を活かすまちづくり委員会

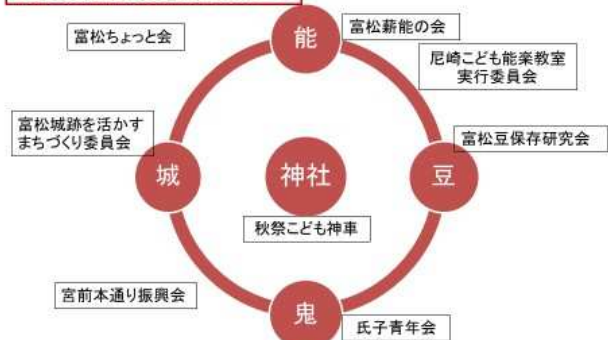


秋祭り こども神車の曳行



次世代を育てる地域のまちづくり団体

歴史と文化を活かしたまちづくりグループ



協働のまちづくり-富松と行政の関係

1. 富松薪能 …(財)文化振興財団
2. 富松一寸豆…農政課
3. 茨木童子 …尼崎北小学校
4. 富松城跡 …歴史博物館
5. 鎮守の森 …(財)緑化公園協会



意見交換の様子

(大永委員・狩谷委員・中田委員で意見交換、市政課題研修参加者は隣席などで意見交換)

- ・私は塚口小学校区だが、富松のような取組がないので地域のことが分からない。
- ・子どものころの思い出は、アミューズメントパークに行ったことなども覚えているが、住んでいる自分の町の小さなイベントは、記憶の入れ物がどこか違うように思う。とても良いことでうらやましいと思った。

意見の全体共有

- ・難しい話かと思ったら、そうでなくて、とても引き寄せられた。私も、まちづくりの課題があれば解決しよう、なかったら作ってしまおうというタイプで、よく分かる。仲間の思いが熱くつながっていった、それが未来ですばらしい形になっているのに胸が熱くなった。東難波町でイベントに関わっているが、コミュニティの担い手が70代・80代で高齢になっている。この間の秋祭りでは、2日間ちらし寿司とおでんを販売していたが、子どもたちはあまり来なかった。かつては屋台をたくさん出して子どもがたくさん来ていたということだった。存続するのは難しいが、自分が子どもにバトンを渡していきたいと思うので、富松の話を聞いてとても勉強になった。色々なチームがあって、未来に向かうまちづくりはよいものと思った。

トークセッション ※辻川委員、船木委員、善見委員で意見交換

(辻川委員)

- ・富松、善見さんとの付き合いは長い。2000年くらいから富松城跡の話があったが、それ以前に様々な活動があったことを本日皆さんも分かったかと思う。当たり前のように富松城跡が保存されたというが、奇跡のような話である。富松城跡は指定文化財ではない。指定文化財でないものの保存運動は日本各地にあるが、保存が勝ち取れた例はほとんどない。地元の郷土史家が応援しても理解されないのが普通で、なんとかなるのは観光地。富松城跡がなぜ保存されたのか、要は観光資源ではなく、地域にとって、コミュニティにとって、尼崎市にとっての価値を自分達で作り出したということ。歴史的価値、学ぶ場であること、コミュニティにとって大事といった話が出たが、最近でこそ文化財はそういった価値があるとか、行政と市民が守ることが大事というのは何となく分かっているが、昭和の時代からそれにつながることをしているのは先進的というか、奇跡のような話

だと思う。市が協働と言い出したのは1990年代後半。それまでは住民自治と言いながら、結局は行政だより、税金だよりだった。震災後に本当に住民自治が大事と分かったが、その頃は行政も力が入りすぎて住民自治を育てないといけないといった、結局行政が育てるのか？といったところもあった。それが、富松のような活動が地域から出てきて、私たちがその発想に学ぶことになった。

1980年代くらいからその発想があったことを不思議に思う。

- ・善見委員や私が関わっている活動は曲がり角にきている。どんな活動も賞味期限があり、世代交代も必要となる。善見委員も考えていると思うので、今後どうしようと思われているか聞きたい。

(参考：参加者)

- ・昨日、尼崎北小学校6年生に出前授業に行き、いろはかるたに書かれている歴史資源を見て読み札を考えるとということをした。富松城跡まつりに関わっていて、富松城跡まつりは手段で、コミュニティの再生が目的だが、目的が見えなくなっているように思うので、少しずつ解決していけたらと思う。

(船木委員)

- ・活動を継続するのが目的化することもある。今後についての話は、最後に聞きたい。
- ・今日出てこなかった話で、地域が小学校に関わり始める経緯、経過について聞きたい。

(善見委員)

- ・尼崎北小学校の校舎建て替えの際に、工事車両が入るため子ども達がグラウンドを使えない時期があった。その時に学校から、余裕教室で遊びのコーナーを作りたいが、地域で見守りに協力いただける方はいないかという相談があった。その話のある前に、私は社会教育委員をしており、社会教育委員会議で今後の社会教育の進め方について議論していた。「小学校校区学習センター構想」だ。そこで、小学校の実情を地域がレスキューしていく必要があるのではないか、学校を応援する地域の大人の応援部隊を必要とするのではないかと考え、富松地域のPTA経験者や子ども会のメンバーを集めて勉強会をしていた。そういった中で学校から相談があったので、「学校を応援する部隊が用意されているんです」と言うと校長先生がびっくりしていた。学校はガードが堅いが、学校の要請に応じて協力しようとする地域には、知っている顔、学校が信頼している人もいたので話が進んだ。それが学校と地域の関係を深めるきっかけだと思っている人も多いが、尼崎北小学校にはそれ以前から節分の日に富松の鬼が学校へ行ったり、一寸豆の栽培に行ったりという関係性がやんわりあったからだと私は思う。小学校応援ボランティア本部の発足メンバーは30人くらいが60人くらいになり、けん玉、将棋、オセロなどする人が出てきて2年ほど実施した。未だにそのコアメンバーが季節の便りを新校舎にディスプレイしている。

(船木委員)

- ・当時、尼崎北小学校は、地域学校協働本部などの、よき事例、パイロットケースとして取り上げられていたが、それ以前の長年にわたる活動の積み上げがあったからこそだと思う。また、校庭が使えないということも、タイミング的には奇跡的なことだったかもしれない。でも、奇跡というが、普段からこうできたらいいのにと考えていないとキャッチできないものだとも思う。

- ・地域の資源・資産を大人が学んで次の世代につないでいかないといけないというのは、今、盛んに言われていることだが、善見委員は理論があつて活動してきたというより、思いを形にしてゆく活動の後に、理論が後付けされてきたということだと感じた。
- ・新住民、旧住民問題が昭和 63 年にあった上で「ふるさとを創ろう」と言っている。私に長崎の友人がいるが、10 年前に 3 つの小学校の統廃合問題があり、3 つの PTA で対立があつたが、ある時「子ども達にとっては母校になるのはこの学校だ。自分達にとっては母校がなくなって悲しいかもしれないが、子ども達にとっては違う。」と言って、3 つの PTA が合同で校歌を練習して歌うことになったと聞いた。富松の話で、それを思い出した。ふるさとを創ろうと思ったきっかけはあるのか。

(善見委員)

- ・同じこの富松地域＝尼崎北小学校区に住んでいるのに、PTA 役員の大人が「塚口族」「富松族」と派閥を作っている。子どもが仲良くやっているのに、新旧住民の相互の思い込み。こんなんではイイのか？ 新住民は地域の歴史や文化を知らない。旧住民はその歴史や文化を広く伝えてこなかったのではないかな？ その溝を埋めて地域の理解を深める必要性を感じた。
- ・PTA の目的ということを意識していた。PTA は、子どもの健全な成長を図るために保護者・親・教師が相互に学び合うためにある。この地域に暮らすすべての大人が、大人の責任として子どもの健全な成長を図る意識をもつ必要がある。そのことに気づき、新旧住民が共通して暮らすこの地域の歴史や文化を学び、それを次世代に伝えることから始めた。
- ・尾浜八幡神社の宮司が先に PTA 会長をしていたので話を聞くと、宮司であるので下手なことはできないが、たくさんの保護者と知り合いになれるということだった。それが勉強、人間として成長していくことだと思った。PTA は社会教育関係団体として位置づけられている。「大人の学習」により、こどもの健全な成長を図る「ふるさと」づくりができるのではないかと仮説を立てた。それは、子どもだけではなく大人にとっても健全な成長につながる生涯学習となると考えた。

(船木委員)

- ・尼崎市でも策定中と聞いているが、皆さんに、文化庁の文化財保存活用地域計画の資料を配布している。歴史的資産として指定されていれば保全・活用となるが、指定されていないけれども、その地域やまちにとって大切なアイデンティティの根幹になるものを、地域の人が意味づけ、大事にする。その活動がないと、実は行政が本気になって動くことはない。富松はその先行ケースだと感じた。そのくらい富松の活動には意味と価値があると思っている。文化ビジョンの中では、いわゆるハイアートだけでなく、日常の中の生活文化も「文化」と捉えている。本日は、新住民、旧住民が一体になって次の世代に渡していくことを、善見委員から学んだという場であつたと思う。
- ・今後についてはいかがか。

(善見委員)

- ・富松城跡を活かすまちづくり委員会という組織に特化した話ではなく、地域資源をおもちゃとして見ており、私は、おもちゃを通じて集まっている人々の場を作ってきたという役割。底辺にあるのは、目的。おもちゃを通じて学ぶ力を作ることを目指している、それが生涯学習の展開だと思う。それぞれのグループに生涯学習の機会がある。取組をすることを通じて学び合っていく、それを目指してきたと思っている。『まちづくりは大人が「おとな」として正しく生きていくために学ぶ、生

涯学習プログラム』と書いたが、富松地域の大人が学び合うプログラムが展開されていくことを期待している。そのためには地域資源というおもちゃが必要で、歴史や文化を学ぶ教材となりうる。

- ・学校と地域の関係性が加わっていくところで、この生涯学習プログラムを爆発させたいと思っている。怖いくらいに道がつながってきた。社会教育委員をさせてもらって、走っていく道が開かれていった。富松の取組や活動を通じてグループができてくる。そうしたグループが学校と地域の関係性を高めていくことだろう。私の目指しているところは、組織を守ることが目的ではなく、その活動が地域教育力の向上につながっていくこと、生涯学習社会の構築につながっていくことだ。生涯学習プログラムは100年以上かかると覚悟している。尼崎市民は皆、プロデューサーになれる。誰かに自分の住みたい町をつくってもらうのではなく、あなたがその住みたいまちに何ができるか、ということだ。

(船木委員)

- ・なるほど、地域の宝をおもちゃという言葉で捉えたということに集約されるが、事業が残っても残らなくても、それよりも、地域の人が集う場や、学び続ける人を創りたいということの思いが根底にあることが改めて分かった。
- ・ユネスコが1985年に学習権宣言を出しているが、「学ぶことは、人類が出来事に翻弄されている客体から、歴史を創り出す主体へと変えていくため」だと言っている。学力や偏差値ではない、これが学ぶことのアンサーだと思う。

第5回懇話会の様子

日時 令和7年2月27日（木）13時30分から16時15分まで

場所 A-LAB

出席委員 大永委員、狩谷委員、辻川委員、中田委員、船木委員、善見委員

※（公財）尼崎市文化振興財団職員がオブザーバーとして参加

議題

- ・視察 A-LAB Exhibition Vol.46 第2回白髪一雄現代美術賞受賞者個展
井上裕加里 「JIN, JIYAN, AZADÎ 女性、命、自由」
- ・A-LAB 運営事業について

意見交換の様子

A-LAB 運営事業について

（中田委員）

- ・A-LAB の立ち上げ時には、芸術大学で卒業生を間近で見えていて、若いアーティストの気持ちも分かるので、提案をさせていただいた。尼崎市にはアートギャラリーがなく、小規模で展示できる場所ができればと思った。市民の作品を展示する場所ということではなくて、アートとして表現する起点となる場所として、それを見た市民に「自分もやりたい」と思ってもらえたらという狙いだった。

※写真を見ながらリノベーション時の様子を紹介

大学では制作の課題が出されて制作するが、卒業した瞬間からそれがなくなり、自分が何者になるのか、なぜ作るのか、仕事としてするのか、趣味としてするのかということに直面する。大学時に認められていなかったらやりたい気持ちがあってもやめてしまうという瀬戸際が卒業時で、そのタイミングで、可能性があるし面白い学生を推薦して展示をすることができたらと思った。それが Artist Gate の企画。また、卒業して数年経っている作家の展示も、見てもらう工夫をどうするのか、毎回考えながら展示している。

※部屋ごとの展示の様子を紹介

貸しギャラリーでは自分で全部しないといけないが、A-LAB では作家とディスカッションしてライトや什器を決めていき、展示方法のチャレンジができる。壁に額をかけることしかできなかった作家も、「こんなこともできるの？」と制作した場合も多いと思う。

（オブザーバー）

- ・作家と事前に打合せをして、どういう展示をしたいのか、チャレンジしたいことを聞き、できるだけ理想に近づけるようにサポートしている。
- ・テレビで取り上げられてもいいと思う。もっと評価されてよい。
- ・若者だけでなく、チャレンジの発表の場になればと思う。アートや美術は衣食住に比べて、なくても生きていけるもの、まちにあるのは豊かさの象徴でもある。それを応援することができるまちということで、私はこういう場所があってくれたらと思う。

- A-LAB の施設はいずれ使えなくなるが、耐震化後の総文には面積的に機能を入れるのは難しいと思う。チャレンジを支援するということでパイロット的にしてきたということなら、無駄になることはないが、やめてしまうのはもったいないと思う。こんなに許容できる、若手を支援するところは他にないので、継承して欲しい。せっかくやるなら、羽ばたいている作家のようなストーリーの見える化、ユニークな使い方を許容していることの見える化、といった戦略を持つとよい。今回の展示も、人権問題を市として発信する中で取り上げることも戦略。また、歴博と田能資料館、尼信会館、開明庁舎は結構バラバラだと感じる。市として戦略性を持ってやれば相乗効果が生まれる。生涯学習プラザの講座と関連させることなどもできると思う。
- A-LAB は夢へのチャレンジに沿った取組と言えると思う。壁に直接描くことができるようなところがなくなるのはもったいない。総文も面積が縮小されるし、A-LAB に代わるものが準備できるなら続けていけるとよい。
- 来場者数について、作家が不満という意見があるが、本人は集客の努力をしなくてよいのか。広報についても、それなら自分たちでする必要があると思う。
- 施設の場所が悪いとのことだが、立地が悪くても選んだのは自分。こういう場所だからこそ自由にできる面もあると思う。
- 若手だけでなくベテランもできるとよい。ベテランの先生もいつもとは違う作風をチャレンジしたいことがあるかもしれないし、ベテランこそ殻を破るのは難しい。年代、キャリアに関係なくできるとよいし、サポートして欲しい。
- A-LAB の A はアシストの A だと感じる。夢へのチャレンジの応援に沿った取組だと思う。来場者数が 1 日 8 人から 10 人だと少ないとは思いますが、場所の問題が確かにあると思う。総文の耐震化の中に A-LAB の精神が投入されるといいのではないかなと思う。今後も継承していくべきことは、アシストマンをどれだけ作っていけるか、それが分母としての文化を構築していくことになると思う。A-LAB のスピリッツは、尼崎の文化の方向性として大きく発信できるのではないかなと思う。文化で尼崎の市民力を上げていくとよい。アシストラボから文化の力を、行政が広げていって欲しいと思う。
- A-LAB の今のスタッフ、職員が芸術家を支える状態がどこかでできたらよいと思う。A-LAB は自由にできる場所だと思った。色んな人が活躍できると言いながら、本当にそうか？と思うことが多い。若手じゃなくても、年配の方でもチャレンジできるよう幅を広げてもらったら、気持ちが救われる人があると思う。42 歳の友人は 40 歳から絵を描き始めた。クラウドファンディングで 80 万円集まり、ニューヨークで個展を開いた。そういう人も気持ちは若手だと思う。尼崎が好きで、文化ビジョンで色んな話を聞いてきて、今日は集大成のように感じた。

(オブザーバー)

- 私はスタッフの蓄積が大事だと思っている。ノウハウの蓄積、作家との付き合いの蓄積は、施設にとって財産になるもので、切り離すことは今までかけてきたお金も無駄にすることだと私は思う。

(オブザーバー)

- 立ち上げ時から関わってきた。はじめた当初は 1 日 5 人来るかどうかなという中で、住宅地にあるので、子ども達だけで来ては帰っていく。別の日にまた来て、その子どもたちとなじんでいくこともある。年配の人と話したことも印象に残っている。昔は電車・飛行機で遠くに行っていたが、年をとって自転車になり、自転車も難しくなったが、歩いていける場所にあってうれしいと言ってい

た。また、7時まで開館していたときに、6時台に小学生の女の子が2人来て、彼女達はアートに興味はないので、ロビーで携帯をいじっている。なぜこの子たちはここで時間をつぶしているのか、場所があるのは意味があると身をもって感じた。みんなにとって何がいい形なのかずっと考えている。今の場所はバランスがとれていると思っている。

(オブザーバー)

- ・我々は市の事業を受託しているので、建物のことはこちらで決められないが、10年の蓄積、ノウハウ、作家との人脈があるので、今後、新たなハコが持てるのが理想だが、持てなくても市内の空いている場所や耐震化後の施設で展開できるよう、財団も準備していきたいと考えている。
- ・効率化重視、結果重視の現在の世の中は、実は、人が集まり、出会う場があること自体に意味がある、というふうになかなかない。その意味ではA-LABはアートスペースである以前に、人が集まったり、出会うという公共スペースであると捉えることができるだろう。今日の話聞いて、社会教育的な機能もあると思った。尼崎がこれまで取り組んできたことで、誰かのチャレンジを応援するまちと言うコンセプトのもとに、特に若い人、機会がない人を支える事業が実は、色々ある。尼崎のユース政策は全国的にも有名。スケボーパークに取り組んだ彼らは、このまちだから大人が応援してくれると言っていた。まち全体がアシストというのを持っている。生涯学習プラザやサマセミもそうだし、ゼロカーボンベースボールパークで阪神の2軍を応援するのも。起業支援のアビーズやトレピエも。また、市の事業だけでなく、市内にプログラムはたくさんある。その連続性、トータルの中でA-LABを解釈し直すことも重要だと思う。まちのメッセージとして考える。A-LABは表現のチャレンジの場所なので、制限がない廃館や空き家などを回り続けたりするのもありだろう。尼崎は、育った人が大阪、東京に行くステップの場所でもある。次のステップに行くための場がある。こういったコンセプトで、様々な事業がトータルでつながっていくのが重要だと改めて思った。A-LABは暫定利用ではじまってよくここまで続いてきた。なくなることを悲しむのではなく、これをきっかけに可能性に気づけたことで、今後新しい組み合わせを考えていけたらよい。